

ときの玉手箱

博物館からのメッセージ

第97回

井伊直定に献上された鳩杖

贈る者と贈られる者の心の交流

彦根城博物館では、2年に1度、人權学習シリーズの展示を開催しています。今年「『老い』を考える」というテーマで、高齢者に関する歴史をたどりながら、これからの高齢社会のあり方を考えたいと思っています。

彦根藩8代藩主井伊直定が50歳を迎えた際に献上された鳩杖について紹介します（写真）。この鳩杖は、直径1.6cm、長さ112.6cmの堅い丸材の先端に、小ぶりの鳩が乗っています。鳩の姿は、一木の一刀彫りで、目・くち

ばし・手羽・尾などがとても優しく表現されていて、素朴な美しさを備えています。鳩は餌を食べるとき、むせることがないといわれ、長寿の者も鳩にあやかりたいとの願いを込めて、長寿の祝いに鳩杖を贈るものとされています。

鳩杖が贈られたときのようすは杖とともに伝わった書付によって詳しく分かります。寛延4年(1751)2月13日、直定は、家老、用人などの重臣クラスの者たちを召して、自身の誕生日、特に50歳を迎えたお祝いとして祝宴を催しました。祝宴には、直定の乳母であった正善という女性が、90歳で健在だったため招待されました。正善は、誕生祝いとして

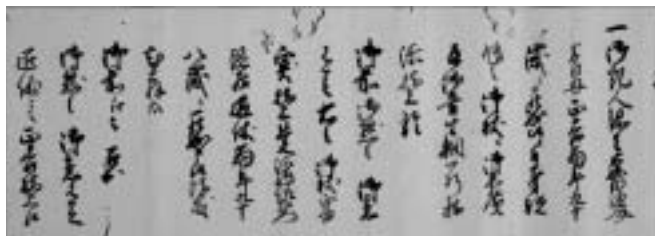
鳩杖のほかにも末広(扇の一種)と生鯛1折を献上しました。

興味深いのはその場での行為です。鳩杖を贈る際に、まず正善自らが鳩杖を突き、さらにその場に同席していた当時98歳の退休という隠居にも鳩杖を突かせ、彼らの「歳(長寿)にあやかるよう」にと直定自らも鳩杖を突きました。退休は「珍しき老翁」ということで介添えの者に連れられてきたとあり、言祝ぎの翁の役割であったことが分かります。直定の50歳の祝宴は、50歳を迎えたことを家臣たちと共に祝い、また、自らを育ててくれた年長者からお祝いを受け、その長寿にあやかるという意味がありました。さらにはこの祝宴は年長者たちに対する直定の感謝と尊敬の念を込めた慰労の場でもあったと考えられます。「人生五十年」といわれた時代です。実際、直定より前の藩主は3人続けて若くして亡くなっていました。その喜びは大きなものであったでしょう。

ここで紹介した例は、江戸時代の大名におけるものであり、藩主の徳を示すという面がありますが、お互いが支え、敬意、感謝する気持ちをもって心を通わせることは、「老い」の問題を考える上で忘れてはならないことといえるのではないのでしょうか。

(彦根城博物館学芸員 齊藤祐司)

写真の史料は、彦根城博物館テーマ展「人權学習シリーズ」『老い』を考える」で、9月17日(金)から10月19日(火)まで展示します。



献上のようすを伝える書付



先端部の拡大



献上された鳩杖